

言
織田信長
元を桶狭間に破つて天下に名をなし、正親町天皇の勅を奉じて京の都に入った。尊皇の初め天下人で、明智光秀のために本能寺に自刃してのち従一位太政大臣を贈られ、京都船岡山の上の建勲神社に祭られた。信長の父信秀は尾張の国守で名門の出である。又、茶人織田有楽斎は信長の弟で名は長益、信長の死後は秀吉に仕え、更に家康に従って摂津と大和の国主として三万石を領した。

よもやま
敬称略

○晴風文月例会 七月二十日(日)昼東京新宿朝日生命地下和室(主催晴風会) 旅一浅野晴風 重衡一山口正純 御夢の跡一坂入晴峰 常陸丸一原島晴洲 天目山一青木晴城 屋島の誓一関英子 本能寺一加藤錦陽 吟石童丸一原田吟普 鉢の木一若林晴夜 薩摩守一緒方晴舟 かに、母一山下晴風 隆盛一望月啞江 隅田川一押川旭葉 道成寺一石田脩水、高松城(上)一鈴木密水 同(下)一浅野晴風

○藤川晴水夏季演奏会 七月二十八日(月)夕東京上野本牧亭(主催晴水会) 舟弁慶一山口速水 本能寺一河合桃水 龍の口一野川瑞水 相模湖一菊地甘水 井伊大老一宇田川海水 小栗栖一杉本淳水 白虎隊一平井洲誠 西郷隆盛一平野鉦水 吉野藩一島田春水 川中島一内田琴水 高橋狸水、絃本孝水 新撰組一藤川晴水 湖水乗切一

小山田賞水
○錦川流名流演奏会 八月二十三日(出)屋長野市勤労福祉センター(主催石川泉水) 城山一西村峰水、絃市岡塚水 石童丸一広田帖水 合奏紅葉狩一市川、松橋、和田、戸谷、鈴木 勧進帳一鈴木密水 川中島一石川泉水、剣舞山宮岳偉 外に詩吟舞九題
○藤巻旭鴻演奏会 八月三十一日(日)昼東京新宿伊勢丹ホール(主催旭鴻会) 五絃段一合奏 備後三郎一石崎旭光 お蝶夫人一清田旭俊、絃旭陽 秋風故郷山一藤巻旭陽 絃旭彰、旭苑、笛石高社中 北の庄一太野旭翠、橋上旭英、上原旭映、絃旭紅 加羅の兜一吉田旭泉 舞扇鶴ヶ岡一長谷川旭山 絃旭鴻、旭陽、笛石高社中 五条橋一富山黒田旭映、絃旭紅 華道華の恵み一泉旭哉、絃旭陽、旭彰、旭鴻 加藤清正一大阪大西旭好、絃旭鴻 乳人政岡一市川石崎旭匠 茶道松風の曲一宮川旭花都、絃旭光、旭節、旭哉、旭苑 吉野山懐古一大阪南崎旭薫、絃旭鴻、旭陽、旭彰、笛石高社中、羅生門一荒井旭豊、佐藤旭香、松元旭川、絃旭紅 綱箱一名古屋熊手旭辰、藤巻旭陽 藤巻旭彰、絃旭鴻、旭花都、旭光、小栗栖一谷口旭節 若き敦盛一青山旭光、絃旭鴻 旭陽、大楠公一太津旭紅、絃旭鴻 坂本龍馬一浜田旭鸞 二〇三高地一藤巻旭鴻 時雨會我一錦琵琶家水藤錦櫻 新琵琶楽(一)黒田節一長谷川旭苑、藤巻旭鴻、立方藤間敬之丞、(二)荒城の月夜奏曲一正絃旭紅、旭光、旭節、旭薫、旭豊、旭川、旭哉、旭英、旭優、旭辰、旭彰、大絃旭陽、小絃旭花都、琴笛入

○第二回演奏会 九月十四日(日)昼浜松市板屋町会館(主催薩摩琵琶鶴彦会) 明治百年の歌一河西晃山 赤壁一野末晃華 桶狹

間一橋谷晃洲 国給一青島晃苑 武蔵野一原晃道 七郷落一横山篤水 菅公(一)大石晃月 同(二)三上晃城 月下の陣一加納岳容 船弁慶一庵原佑水 城山一柿沢晃峰 白虎隊一野中峰洲 似我一染谷晃岳 小曲三方原一伊藤晃嶺 湯陽江(出)山田岳叢 同(下)一鎗田岳造 五条の橋一加藤錦総 常陸丸一小野鶴彦 吉野の奥一橋谷岳賜 小栗栖一来賓岩見旭香 錦の御旗一岡尾鶴城

き
爽秋の十月、永い夏がようやく終ってホッとした矢先きに九月に入ってから三十六度何分という残暑が数日間続いて苦しめられたがそれも昨日と過ぎ、そのあとに秋は駆け足でやってきた。いよいよ琵琶の世の中となった、本号予告欄にも報道されている通り京絃社に寄せられた各地の演奏会や集会の催しも仲々賑わしく百花燦乱、本月から来月にかけては文字通り我が世の秋という感じが深い。燈下親しむの秋、琵琶を楽しむの秋、巻頭掲載の阪田栄三郎氏の随筆の通り日常の小事に抗泥せずに健康の喜びを噛みしめつつ四絃五絃の醍醐味に心ゆくまでひたろうではないか。

昭和四十四年十月一日発行(非売品)
編集者 植村 真水
発行所 京絃社
京都市北区衣笠西馬場町二九
和田才一ビル 二〇一号
電話(46)八三二六(46)二八七六番
内線 二〇一番

琵琶
機関紙

京絃

才一八四号

京絃社

随筆
健康の喜び

阪田栄三郎

喜びそのものが永続的、刹那的の差はあれ、人それぞれに喜びというものはある。しかしその最上は「健康」ということであろう。尚欲を云えば日々の仕事に希望があつて適当に琵琶を楽しむ、どうか日常生活にこと欠かなければ、一般庶民には最高であると思う。仕事に於ける希望は、体内に情熱をもちし日々の過ぎることの早きを感じさせると共に、成さねばならぬ事の如何に多きかに驚き、なさねばならぬと思ひながら思うままにならぬこと、歯がゆきは不健康な時でも起こるものである反面、健康なときに感じる心境とは非常な差異がある。前者は湿っぽく、後者は活達である。

また、日常生活にこと欠かぬという事は、住むに家あり不意の災害に備えありというのが之に該当する。人間一生に持家一軒建てれば最高だと云うが、現在の物価高ではまあまあというところで我慢して遣こう。日々色々の不満もあるが、幸い健康で春に木の芽が生成する如く、子供や孫達も成長過程を辿っている事は誠に幸せと喜ばねばならぬ。勿論

これは私一人の力ではなく、家族の協力と友人知己の蔭ながらの援助があればこそである。然し基本的には家族全員健康ということが大きな要素であつて、少々の借財の如きは少しも苦にせず、除々に之を排除してゆけるのは我ながら心強く感じられる。不平不満を深刻に考えるのは健康上よくない。不平不満そのものを現在或は近き将来にかけて解決すべき問題とし、ゲームを進めてゆく上の改善点というような軽い気持で解決にあたるならば、不平不満も又楽しいものである。借財の如きも一種の信用のパロメータという程度に考え、あせらず計画的に崩してゆくという気持で居ればよい。

私は時々琵琶を楽しむのと、「京絃」に寄稿するのを、ストレスの解消と心痛事を忘れることに利用している関係上、投稿すべきことは次々と脳裏に浮かび、之が幸して心配事を余り深刻に考えず、健康保持に役立っている。今後健康保持の一方策として之を実行したいと思う。何と云っても「まづ健康」で、心から現在の健康体に感謝している。

「平家物語」の物語(二九)

波の下にも都の候ぞ

…二位殿やがて抱き奉りて「波の下にも都の待ふぞ」と慰め奉り千尋の底にぞ沈み給ひぬ。悲しきかな、無常の春の風忽ちに花の御姿を散らし、情無きかな、分段の荒き波玉体を沈め奉る。…

壇の浦に散った平家一門の中で哀れだったのは安徳天皇、追いつめられた平家は「世の中は今はいかにと覚え候」という知盛の最後の判断で次ぎつぎに入水、自害するのだったが安徳天皇は僅か八才。なぜ死ぬのか分らぬまま死んで行ったのが悲劇に輪をかけた。死を告げに来た二位の局(宗盛の母)に主上は、「われをいづ地へ連れて行くのじや」「君は未だ知らし召されませぬか。万乗の主とお生れ遊ばされましたなれど、悪縁に引かれて御運もお尽きになられたのでございます。この国は物憂きところ、波の下にこそ極楽浄土のよい都がございます。」「そう二位殿に云われ抱かれて幼帝は海の底に沈んだ。」「波の下にも都の候」。平家物語得意の仏教思想を説く名セリフ。が、ここでは「われを何処へ連れて行くのだ」という幼帝の生々しい、人間の声。に一步も二歩も譲る。なぜ

か、安徳天皇は人間でありながら政争の具に使われた生けるロボットだったからである。源平争鬪の動乱期に生れ、生後僅か一ヶ月で立太子、ついで即位。寿永二年(一一八三年)宗盛にかつがれ西奔、平家一門と無理心中させられ、三種の神器と「コミ」の天皇に過ぎなかった。「われをどこへ連れて行く？」幼帝の無邪気な言葉は中世の変革の厳しさ、そこから生れる矛盾に対する痛切な叫びとされる。勿論歴代天皇の中には非人格化され、戦争に利用されたのは安徳帝だけではなかったが。

幼帝の最期がある意味で如何にも人間臭かったとすれば、知盛の最期は仏のように落付いていた。自害出来ずに海中に浮きつ沈みつ、遂に捕えられてしまう宗盛とは雲泥の差。戦況を心配する女房達に「珍しい東男をやがて御覧に入れましよう」とカラカラと笑ったという。「見るべき程のことは見た、今は自害しよう」というのが最後の言葉。その笑い声の中には平家の運命を見届けた不思議な落着きがあったのではないか。そうした心境で死んでゆけた知盛は幸いであつた。

誰よりも不幸だったのは、死によって一切の悲劇から解放される筈のところを助けられ、その悲劇を一生背負って生きなければならなかった人—安徳天皇の生母、建礼門院だった。

安徳天皇は壇の浦古戦場に近い下関市の赤間神宮に祭られている。もと阿彌陀寺と云つ

狂醉亭漫録(四十七)

古谷 竟水



本稿も老生身辺多端の上に多少暑氣中りの為三ヶ月に亘り休載し、諸賢の御期待に反した事を深くお詫び申上げる。

赤穂事件も討入から切腹まで逐次叙述する予定であるが、中心人物たる大石の智謀とも考えられる遊興に就て少し詳述したい。

此の件で直ちに連想するのは琵琶歌にもある薩摩武士村上喜剣との出会いから其の軌死の件であるが、今一例として浪曲台本から抜萃する。先づ京都祇園の一角で遊興中の大石に対し喜剣が侮辱を与える場面は、

「魂抜けたか内蔵助、薩摩武士の鉄拳を、喰うて見よ」と固めた拳で丁と打つ、「アイヤ是は乱暴、お手が痛みは致さぬか」「犬侍よ

是を喰らえ」と、小鉢に盛りし蛸肴、足に挟んでグツと出す。「イヤ、是は何より大好物、手を出して足を頂く蛸肴」「何を云うても張り合ひのない。言葉交すも汚らわしい」と、含んだ痰を顔に吐き、畳を蹴って出て行く。

後見送った内蔵助、真心面に現われて、喜剣先生嬉しいが、明けて云われぬ胸の内、わかる時節も遠からず……とある。其後喜剣は諸國を遊歴し、元禄十六年四月江戸に廻った時初めて赤穂浪士の快挙、殊に大石が主領であつた事を知り、泉岳寺の墓前で切腹する。

「卯月も去りて五月雨の、昨日も今日も極き曇り、降りみ降らずみ定めなき、頃は節句を明日にした、五月四日の入相時、シャアシャアと降る雨の中、笠も冠らず頭から、ぐっしより濡れた濡鼠、山門潜る正面本堂、左手斜に上る石段の、冷光院殿墓前を過ぎ、ぐるり廻れば四十七士の墓所、一際目立つ大石の、墓前に坐すは村上喜剣」(中略)「如何に大石御大人、御身と我れと逢うたるは去年初めて、其の折の無礼の段は言語に絶えたり、御身は赤穂の城代家老、我れは島津の足軽小頭、身は賤しうして取るに足らず。さり乍らお笑いあるな内蔵助殿、先祖は大塔の官に仕えし門地村上彦四郎義光が末葉、御身と肩を比ぶる事は能わねど、語る事は暫時許されよ。されど御身を足蹴に致し、且つ辱かしめ且つ罵り、刺さえ蛸肴を足にて喰わせ、犬侍と云うに至って、実に赤面汗顔の至り、我れ武士と生れて武夫の執るべき道を知らず、六韜三略

の謀事あるを悟らず、唯々目前に見る御身の動作に依つて怒を發せしは、恥かしや内蔵助殿、是ぞ世に云う匹夫の勇」(中略)「ああ天なるか我が父よ、我が愚かさは宥されよ、況んや長く養われた殿の恩、海にも山にも代え難し、一と度去りて二度生れ、御恩報じな仕り度く弓矢八幡我が再来の暁は、天下に功を樹てさせよ、浅野殿大石氏、冥府に於て御面会な仕らん」と、生ける人に言う如く、拳を固め腕を叩き胸を打ち、我れと我が鬚の毛を劣り、或は大地を丁と打ち、男涙をハラハラ「斯くてあるべきにあらず」父がかたみの大剣は、泉岳寺住持へのかたみぞと、此方の石に立て掛けて、小刀の鞘を払い、予て用意の白布に、キリキリ巻いて尖先を出し、双肌脱いで下腹を撫で、我れと我が左りの横腹へウツツと許りに突き立てたり(中略)小坊主二人に提灯を持たせ、上り来った住持玉堂、見れば吃驚唐紅「ヤツ貴下は村上喜剣殿、血迷うたか」と抱き起され、喜剣は住持の顔を

見て冷やかに笑ひ「薩摩武士の死際を、よう見届けて下されや、故郷で流行の流行唄、一つ謡うて聞かせうかじ、ヒゴ：肥後の加藤が来たならば、煙硝肴に弾丸会釈、それでも懲りずに来たならば、首に刀の引出物」と謡い終つてガツクリと、人の命は春の夜の、唯手枕の夢の間の、夜半の嵐に散る桜、二十四歳を一期として、義士を慕うた薩摩武士、村上喜剣の切腹談」以上は桃中軒雲右衛門の名人芸であるが、私が之を聞いて感激したのも早

や六十年の昔である。

序に記するがこの口演の中の大塔の宮を、おおとうと発音しているのは流石偉いと思う。先年横須賀の斎藤水女史が、護良親王を祭る鎌倉神宮の宝前で琵琶を献奏した際、宮司から、畏れ多くも後醍醐帝御命名のおお塔の宮様をだい塔と読み違えるとは不敬であると注意されたそうだが、成程古典大平記もおお塔の宮であり、奈良県吉野郡にはおお塔村が現存している。琵琶人の大半が間違えている様なので一言附記する次才である。

さて村上喜剣は実在の人物か？私の寡聞の限り、泉岳寺の過去帳にも、どの史書にも其の名は無い。若しこの物語が単に口碑に過ぎないとすれば、村上義光の末孫等は噴飯物である。然し物語としては武士道精神をよく現わした面白いものである。

之が誤説とするも、一寸した手掛りはない事もない。泉岳寺の四十七士の墓地の一端に「刃道喜剣信士」の碑あり、右側に「薩州産宇都宮成高寺現住僧潤建焉」左側に「明和四丁亥九月十六日」とあり、之は一七六七年だから元禄十六年の一七〇三年から六十四年後となる。之が村上喜剣の墓と信ぜられ、林鶴梁は「烈士喜剣伝」を著わし、その内容は口碑によるものらしく、前記浪曲と略々同一のものである。然るに別説では義士切腹に参加しなかつた寺坂吉右衛門は天寿を全うし、三河の某寺に於て死去した。明和四年九月十六日歿、行年八十七歳、法名刃道喜剣信士

とあり、之を泉岳寺に移建したものと考えられぬ事もなく、自然村上喜剣は消滅する事になる。従つて有名な村上喜剣も、まづ架空の人物と考えて差支えないようである。大方の御垂教を願う次才である。(未完)

詠	時	十月五日(日)正午開演
名	所	京都四條堀町山一証券ホール
曲	主	催 三 美 会
演	出	演 東西各流派名手多数
奏	(入	場 無料)
告		

切抜帳から(四四)

平井 春 嶺

終戦の真相(二二)

十二、終戦内閣の総理

鈴木貫太郎大将の人格
この機会に私(元内閣書記官長迫水久常氏以下同じ)は少しく鈴木大将の事をお話し申し上げたいと思います。私は四カ月の間に偉人に親炙した幸福を感じざるを得ません。鈴木大将の軍人としての偉さはここに申し述べた時間御座いませんが、二・二六事件の生き残りであることはすでに申し上げました。総理大臣としての鈴木大将はほんとうに何もお指図をなさいません。国務について申し上げますと、いつも「よし」と仰せになります。お指図を仰ぐと「君はどう思うか」とお

たずねになり、意見を申し上げると「それではよい」と仰せになります。しまいには「書記官長、君が適当にやっておいてあとで知らせてくれればよいよ、何でも賛成するから」と仰せになります。私はほんとうに心配になりまして、間違つてはいけないと一生懸命でした。公式の発言も凡て私の原稿でなさいますが、下読みもなさらないようです。私は責任を感じてほんとうに万幸一生懸命にやりました。併しそこは凡夫です。時にはどうもこの俺れが総理大臣で、あの爺さんはロボットだと思ふこともありまして。

このように思い上っていた私ですが、いよいよ終戦の段階になってからは、始終総理の側にいないと考えが出ないのです。総理はいつものように漢籍を読んでおられるか、腕を組んで部屋の中を歩いておられます。そしていつもの通り「君の考えの通り」といわれます。終戦のあの複雑な事態の処理は何一つ総理からのお指図はなく、みな私が案配したといつても過言ではないのであります。私は平生と違つて総理の側に居なければ考えが出ないのです。総理のお顔を見、総理が仲々暑いねなどとおっしゃるお言葉をきかないと、どうにも処置がとれないのです。

私はつくづく思いました。やはりこの爺さんが総理で私は書記官長だった。普段自分が自分でやっていると思つたのは大間違いで、実はこのお爺さんが目に見えず耳に聞こえない電波のようなものを出していたのに、私は

只それに従つてやつて来たまでだと思ひました。そのとき私は本当にうれしく感じたのであります。総理が全く自我を没却し、神意に同化して居られたものであることを今更乍ら痛感し、このことが如何に偉大なる力を持つものであるかを教えられたのであります。

岳父岡田啓介がこの間、私に対して行った精神的、又具体的指導については、詳しく申し上げる時間がございますが、これ又私の深く感ずるものがあるのです。岡田啓介も総理となりましたとき、この榮譽を受けたのは自分の力ではない、御先祖のおかげである、これから先自分がほんとうに努力しなければ子孫に対して申訳ないと申しましたことは、私の深く記憶する処でありまして、やはり伝統報恩ということをも身につけていた人でした。岡田啓介の忠誠にして無私な人格に、最も深刻な場面に於て親炙しましたことは、私にとりこの上もない幸と存じます。(以下次号)

(次回は、天皇陛下の御聖徳日本を救う)

悲劇の武将
義経愛用の「薄墨」の笛

辻 旭 城

牛若丸が毎夜鞍馬山東光坊から奥の院僧正ヶ谷に、兵法修業に通う道すがら吹いたという名器横笛が駿河の国の禪寺に秘蔵されてあり、茶のかおりと共に有名になってきた。笛の所蔵されているところは清水市村松の鉄舟寺で、この禪寺はもと久能寺と云い、推古天皇の時代久能山に創立されたが、武田信玄が今川氏を攻略して駿河の国に入ったので、焼討ちされるのを恐れて天正三年に現在のところに移された。それから幾星霜、軒は傾き壁は落ち荒寺となつていたのを、明治の初年山岡鉄舟が再興して名称を鉄舟寺と改めた。

寺務所を訪れて「義経愛用の薄墨の笛について聞かせて下さい」と、お茶を持って来た坊さんに頼むと「鬼に角昔のことでハッキリしません、悲劇の武将源義経が落北鞍馬山で、牛若丸の時代から愛用していたといわれて居ります横笛は、あとに見て頂きますが目方が僅か一五〇グラム、長さ三九〇・七ミリ直徑は太いところで一〇・九ミリといったものです。七百余年の永きにわたる風雪にもよく耐えてきており、笛の名人が吹けば今もなお妙な音色を出すことでしょう。」うやうやしく笛袋から取出された薄墨の笛は、漢竹の本体を籐で巻き漆(うるし)で仕上げがして

ある。鉄色のぶい底光りは歴史の深さをしめさせた。武家伝来のものだけに作りは武張つて居るが、戦さのさなかにも風雅の境地をもとめた往時のものふの心根が汲みとれる。

笛の由来について寺宝駿河国新風土記の久能寺の条に記されている「源義経所持薄墨の笛、此笛蟬(笛)についている裝飾金具)なし、中村式部少輔再興、笛の頭に金にて村の字を置く云々」。また駿河国雑誌卷二九上、有渡郡の条に「義朝朝臣の常に手刷持玉ひし漢竹の薄墨と名つけたるを常盤の方より御曹司に伝へ置れし身を放たず携玉ひ」また「浄瑠璃姫別れの悲しみにたへず終にむなしくなれり。母は姫の年ごろ携る所の器物を鳳来寺に納め、薄墨といへる笛は駿河国有渡郡久能山に納玉云々」と記されていた。

この外に筆者が坊さんから見せて貰つた笛の添状によると「文禄四年の夏虫干に名笛がそこなわれているのを発見し、残念に思つた駿河国の城主中村一氏式部少輔が補修した」という記録があった。これを見ると笛はもともと新羅三郎義光伝来のものとされ、それが源義朝一常盤御前一義経一浄瑠璃姫一久能寺(鉄舟寺)と伝わったことがわかる。

これはその後聞いた話だが、駿府城主中村一氏がこの笛を補修してから約四百年たったので、眠つていた笛の魂を慰め、更にその生命の長からんことを祈つて、一昨年十月十五日清水市の鉄舟寺で大篝火を焚いて薄墨の笛供養が盛大に取り行われた。

この笛供養会式にあたり、京都の森田流家元森田光春先生が招かれて薄墨を吹奏したが、四百年ぶりの音色は秋の夜空に冴え渡り、数百の参会者を魅了したといわれている。

錦心流琵琶演奏会
(告)

時 十一月二日(日)午後一時開演
所 西宮市夙川公民館松下ホール

主催 三浦蓮水会

琵琶、詩吟、詩舞、琵琶舞、
剣舞等三十数番(入場無料)

恆例一泊会

薩摩琵琶四明会



残暑厳しい八月三十日(日)恆例の一泊会を浜松の奥山方広寺にて催した。今回は友好団体である東京の薩摩琵琶正統会の協賛を得、又、浜松小野鶴彦師の帥いる鶴絃会が総ての計画を綿密に樹てられ、一糸乱れぬチームワークで実行されて参加四十余名から惜しみない賛辞と感謝の詞とが贈られ、琵琶史を語る大金字塔が樹てられたのである。

即ち、三十日十一時五十分浜松駅に新幹線こだま号にて関東関西両面より同時刻に到着、貸切バスで一路奥山方広寺目指して発車し、途中浜松城、犀ヶ崖、名残、銭取、三方ヶ原、根洗松など徳川家康や武田信玄等戦国時代の武将の古跡を経て龍潭寺に着く。車中

では小野鶴彦師の菩提寺、方広寺派泉院住職高井文郁師が詳細に歴史の解説をして下さり、バスガールは手持無沙汰というハブニングに一同大笑い。

龍潭寺は井伊大老の菩提寺で天平五年行基菩薩の開基、永祿三年(一五六〇年)井伊直盛が今川義元に従い桶狭間で討死し、法名を龍潭寺殿天運道鑑居士としたのでそれをとって寺号とした。庭園は小堀遠州作の立派なもの。井伊谷を経てバスで奥山方広寺に予定通り十四時過ぎ到着、黒門の門額「地自有靈」と紫山禪師の達筆に思わず頭が下る。門を過ぎると小さい池があり弁財天が祀つてある、琵琶入はお詣りせねばと全員祈念。弁財天の裏には立派な総朱塗の山門があり、歓迎のため「琵琶研究会」の標識が掲げられてある。

山門を過ぎると道は急坂となり、道の両側には石像の五百羅漢が点在し、特に溪流の石橋上の五百羅漢五体は尊厳である。それより約三百メートルで本山に到着。

当山は後醍醐帝の皇子円明大師(元選王)が元中元年(一三八四年)に開創された臨濟宗方広寺派の大本山で、円明大師は後の無文禪師、池上作三先生作の琵琶歌で知られている。寺域は老松古杉に包まれ、六十余棟の諸堂が雲間上に或は奇岩怪石の間に建てられて風光明媚、誠に一幅の大絵巻である。守護神として半僧坊大権現を祀る。建物の一部三階建大龍堂の三笑閣の貴賓室に通され、ここで旅装を解き四明会長栗本天芳師の挨拶、自己

紹介、正絃会栗原雨竹氏の祝詞、読売新聞社細江支局芦田重雄氏の取材に依りて合奏場面の撮影(三十一日読売新聞掲載)の後本堂に於て世紀の演奏会を抽籤順に開始。

先づ「無文禪師」を小野鶴彦、森鶴堂両師が献奏し、赤星崩(三)栗原雨竹、新羅三郎(一)栗本天芳、風林火山(一)曾我雨城、茨木(一)小林残水、伊藤公一山之内兼光、吉野落(下)岡部錦蝶、元寇(一)伊吹正陽、小教盛(二)前(一)長谷川博章。ここで夕食のため中断して貴賓室で独自の精選料理と茗若湯を頂き、再び本堂で演奏会に移り金剛石(一)平井衣子、薄陽江(上)山田岳叢、小督(一)佐々木精、足柄山(一)田宮吉平、桶狭間(一)伴野鶴風、形見桜(三)吉成登城、鉢の木(一)岡尾鶴城、彰義隊(一)古家絃風、城山(一)須田岳誠、月下の陣(一)石山岳殿、台湾入(一)有馬南城、小教盛(二)後(一)杉本治作、小教盛(一)前(一)八束一峰、以上で才一日を終り、折柄陵々と照り渡る月を眺めつゝ寝に就く。

翌三十一日五時全員起床、半僧坊御真殿内陣で行われる六時からの勤行に参籠、心身を清め高井文郁師の案内で一般には許されていない菅長の部屋、明治天皇行在所を参観して座禅堂に入り修業の講話を聞いて朝食の後八時から前日に続いて貴賓室で演奏開始。重衡(一)村木錦鷹、太田道灌(一)伊勢谷安江、広瀬中(一)佐川秀邦、小松の操(一)藤崎天光、菅公(一)奥少天鑑、畠山重忠(一)平井春嶺、夢(一)市来芦村、武蔵野(一)辻靖剛、歌曲城ヶ島の雨(一)テイチク小林潤、詩吟(一)村松、志茂野、三方原

一三上昇城、浜名湖廻り(一)原昇道、染谷昇岳大石昇月、伊藤昇嶺、青島昇苑五氏順演、以上を以て演奏会を終り辻靖剛師の一泊会感想談、続いて記念撮影、山内親光(高井師説明)の後十一時貸切バスで出発、大草山から風光絶佳の浜名湖をロープウェイで一跨ぎして館山寺遊園地で浜名湖展を見学し、遠鉄観光ホテルで名物の鰻の昼食をとり、小野鶴彦氏苦心の結果決定された名産の毛筆をお土産に頂き、栗本師の音頭で万歳三唱、意義深い東西交流一泊会の幕を閉じて浜松駅で解散した。

日本琵琶振興会

八月十、十一の両日都懸親一泊旅行 塵を避けて東京の奥座敷眺望絶佳の箱根強羅紅葉閣(押川旭葉女史の配慮による)に本会発足以来初の懸親一泊旅行会開催、参加人員は当初の予想二十名程度を遙かに越えて三十三名の多きに達し関係者を戸惑いさせる程の賑いで斯道発展のためにも誠に意義深い集いであった。

参加者(順不同敬称略) 西郷天風、輕部岳瑞、菊地義美、柿本錦城、広瀬棠水、柴田詔水、宮川宏水、山田洲鳳、速見女史、渡辺菖草、藤本露風、望月啞江、福田雅手、後藤孝、松本諸水、原田旭鳳、安藤敬水、井上義夫、山崎光水、鈴木密水、横濱田辺錦波、小田原若林杏雨、同神部英次郎、同石川雄水、湯河原力石棠水、同高杉花水、埼玉三島粉水、同

埼玉県邦楽舞踊協会

このたび上記協会各流合同公演 演 の設立に伴いこの記念公演が八月十七日と同三十一日の両日各昼夜埼玉会館大ホールで賑々しく開催され、琵琶を始め邦楽舞の多彩な古典芸能の絵巻が展開されたが、琵琶部は才一日「安達ヶ原」鈴木密水氏、才二日「川中島」三島粉水、村松、絃鈴木密水の三氏で公開して頗る好評を受けた。因に鈴木密水氏は同協会の副理事長に就任された。

一水会大阪、神戸

八月十七日午後一両支部共催ゆかた会 時から三浦蓮水女史の幹旋により夙川の西宮市立公民館松下ホ

ルで開催。三十五度の酷暑もものかわ、十一時頃から来て絃の手入や発声の練習をする熱心者もあり、定刻馬瀬大阪支部長の挨拶に続いて、弾奏中は列席者間の私語などで不真面目な態度を慎しむ事を申合わせて左の通り順演展開。青葉の笛(一)吉山、会津白虎隊(一)竹田、大和懐古(一)木村、吟詠(一)吉田、川淵、望月、吉田女史、榎本、浅野、菊地、植田豊水、古田東水、城山(一)三浦和子、龍の口(一)井上碧水、新曲川中島(一)木村蓮水、河内の宿(一)佐々木寒水、桜狩(一)松岡繪月、小督(一)上田樞水、川中島(一)番匠渚水、湖水乗切(一)反町紫水、楠正成(一)尾山好水、吉野落(下)田中敷水、川中島(一)来賓木山旭山、吉野山懐古(一)三浦蓮水、玄上(一)馬瀬繪水(外に蔵本司水、久内舟水、松原精水三氏は時間の都合で欠演)。以上演後ピールの満を引き又三浦家寄贈の福引に打興じなどして楽しい半日を送り解散した。

日本伝統芸術連盟

松本明重氏主宰首記の事務局開設 連盟事務局がこのたび京都市下京区四条通堺町東入るびやビル六階(電話231〇〇三二番)に開設された。

日本琵琶振興会

八月二十四日(日)午後一八時 例 会 時から東京新宿駅前才二尾津ビル六階歌舞練場で開催、台風九号通過後のうだるような暑さにも拘らず定刻には早くも十六名の会員が来場し続いて総計五十名の盛況を呈し佐藤旭天紅、大沢妙水、坂本純

一、吉川城水、望月啞江、速見はる、三島粉水、箕村桜州、涼野城真、伊東旭敏、井坂旭良、松本諸水、山木岳盛、太白詩水、安藤敬水、田中旭公、大井錦波、鈴木密水、西村錦風、原田旭鳳、芹沢百華、鈴木鶴鶴、松村旭圭、普門義則、酒井旭華以上各氏が順次熱演して九時半和やかに閉会した。

京都琵琶協会

(1)台風一過直後の八月二日 定例茶話会 十四日(日)午後一時から市内徳雲寺大広間で開催。三十五度のむせるような暑さの中を伊吹正陽、田中颯水、中島真水、中島旭穂、矢吹華水、古谷寛水、小林旭光、木村維水、美登理進水、水内媿水、平井春嶺、植村寛水の各会員参集、いつもの通り夕刻迄各自一曲ずつ研究発表演奏をしたあと食事を共にして諸般の協議事項を終えて八時散会。(2)九月定例茶話会は雷鳴轟く才一日曜の七日午後から会員矢吹華水女史宅で開かれ平井美登里、木村、古谷、小林、矢吹、梅原、中島旭、中島真、田中、若宮、伊吹、植村の諸氏出席、日役迄各自の熱演を楽しんだあと十月五日の三美会、同二十六日の協会秋の演奏会などの打合せをして九時解散した。

剣路日本国風流

北国俊(尊水)氏の幹吟詠吟舞大会 旋による剣路市開基百年

記念の首題が八月三十一日同市公民館大ホールに於て日米加吟詠連盟、国風流詩吟剣路支部の共催で開かれ箏、尺八、鳴物、華道などの賛助を得て吟詠吟舞九十番を披露し最後に支部長北国俊氏の「養老」(箏、鳴物入)で盛会裡に幕を閉じた。

琵琶を

薩摩琵琶片桑三面、筑前琵琶譲ります 四絃五絃各一面、何れも完全手入れ済み、希望者は静岡市沓谷三丁目一九三ノ二、伴野鶴風氏に照会されたい。

- △京都琵琶協会十月定例茶話会 十月四日(日)午後一時下京区八条西大路西入田中颯水氏宅(電話31〇三五一番)
- △三美会名曲演奏大会十月五日(日)昼、京都四條堺町山一証券ホール
- △旭会全国大会 十月十一、十二両日(日)昼夜、神戸市海員会館
- △山崎旭琴会全国大会 十月十二日(日)昼夜、東京才一証券ホール
- △一水会全国大会 十月二十五日(日)昼夜、東京上野美術協会ホール
- △京都琵琶協会秋季演奏大会 十月二十六日(日)昼、京都安井金比羅宮会館
- △日本琵琶振興会例会 十月二十六日(日)午後一時、東京新宿駅前尾津才二ビル
- △三浦蓮水演奏会 十一月二日(日)昼、西宮市夙川公民館松下ホール
- △水藤錦機演奏会 十一月十四日(日)昼、東京才一証券ホール